

今年心に残ったこと

2011年(平成23年)は、モーメントマグニチュード(Mw)9.0の東北地方太平洋沖地震が起き、大規模な津波によって2万人に近い多数の犠牲者を出した年として、我が国の歴史に残る年になった。原発事故という、あとあとまで影響が残る深刻な事態も起こった。巨大地震だけでなく台風による被害もあった。自然災害の多い年だった。国内だけでなく、タイでも大洪水が起き、進出している日本企業の工場群が大きな損害を受けたことも記憶に残ることだろう。時代区分が「戦後」から「巨大地震後」に変わる節目の年になりそうだ。

このような悲しむべき出来事があったなかで、良かったこととして私の心に残ったことが、少なくともひとつあった。

それは、日本文学・文化の研究者・紹介者として知られるコロンビア大学名誉教授のドナルド・キーン氏(Donald Lawrence Keene)が、巨大地震が起こった後で、日本国籍を取り、東京に永住することを明らかにしたことだ。キーン氏は1922年6月18日生まれなので、既に89歳だ。この年齢の人が、原発事故の後、多くの外国人が日本を離れて帰国するなかで、わざわざ日本国籍を取り、東京に永住することを決めたのだ。これは、多くの日本人にとって全く意外だが、明るいニュースだったはずだ。私も、暗い部屋に、思いがけない方向から一筋の光が差し込んで来たような気持ちになった。

キーンはニューヨーク市ブルックリン区で生まれた生粋のニューヨーク子だ。両親が離婚するなど、少年時代は必ずしも幸せではなかったが、コロンビア大学文学部に16歳で入学しているので、秀才だったようだ。1940年、太平洋戦争勃発の1年前に、有名なアーサー・ウェイリー(*)訳の“The Tale of Genji”を読んだことで、日本文学に興味を持つようになった。戦争中の1942年には、日米開戦後もコロンビア大学に留まっていた角田柳作(つのだ・りゅうさく、1877-1964)から日本思想史の講義を受けた。その年に学部を卒業し、アメリカ海軍日本語学校に入り、日本語の習熟に努め、情報将校として従軍した。

(*)アーサー・ウェイリー(Arthur David Waley, 1889-1966)はイギリスの東洋学者で、語学の天才だった。源氏物語を英訳したが、来日したことはない。

戦後、コロンビア大学の大学院に入り、再び角田柳作らに師事した。その後ケンブリッジ大学に長期滞在して、ウェイリーら英国の学者とも交際した。1950年代に京都大学に留学して、日本文学・文化の研究に取り組んだあと、コロンビア大学教授となって、日本文学・文化に関する講義を行うとともに、日本語と英語で多数の著書を発表するようになった。また、東京にも居を構えて、多くの作家や評論家と交流してきた。

巨大地震・津波・原発事故によって、日本が沈没しそうだと多くの外国人が思っていた時期に、キーンは逆に日本国籍を取得して、東京に永住する決意をしたのだ。このことは、彼の日本への傾倒がそこまで強いものだというを示した。彼は、日本人を励まさねばならないこのときに、自分にこそできることをしようと思ったのだろう。この決意をテレビのニュースで知ったとき、私は目頭が熱くなるのを覚えた。学者が生涯をかけて研究してきた対象と合一する、素晴らしい行為だと思う。

キーンが書いたり、話したりしているものには、日本と日本人、日本文学・文化について彼が広範な知識と深い愛情を持っていることが感じられる。長年の研究を通じて、彼は日本人と同じ感性を身につけたのだろう。キーンが話す日本語には、アメリカ人らしい「なまり」が少しあるが、わかり易いものだ。おそらく彼は日本語を書くことも達者なのだろうが、まとまった著書は英文で書いており、それを日本人が和訳していることが多い。雑誌「文學界」の2009年2月号に掲載された「日本人の戦争―作家の日記を読む」もそのひとつだ。英文版の題は“*So Lovely a Country Will Never Perish. Wartime Diaries of Japanese Writers*”で、日本語版の題にはない「これほど愛すべき国は決して滅びない」が主題になっており、「作家の戦時中の日記」が副題として付いている。この主題は、東北地方太平洋沖地震の後で付けられたかのような感じのするものだが、そうではない。しかし、キーンは、今でも同じことを言うに違いない。実際、最近彼は東北地方の美しさについて語っていた。

日本語で出版されたキーンの著書は約40点に上るようだ。一番新しいものは、今年中公文庫から出版された「ドナルド・キーン自伝」（角地幸男訳）らしいので、この年末年始に読んでみたいと思っている。

（おわり）